

悪性リンパ腫について



悪性リンパ腫(以下リンパ腫)は悪性腫瘍の一つで、一言でいえばリンパ球の“がん”です。年間に国内でおよそ2万人が新たに発症しており、決して珍しい病気ではありません。発症の原因を訊かれることがよくありますが、特定ウイルスのキャリア、免疫抑制剤の使用、いくつかの自己免疫性疾患、といったリスク因子はあるもののそれらのリンパ腫全体に占める頻度は小さく、多くの場合発症の原因は不明です。外科的治療や放射線治療などが有効な場合もありますが、治療の原則は抗がん剤を用いた化学療法です。

1. リンパ腫はどこにでもできる

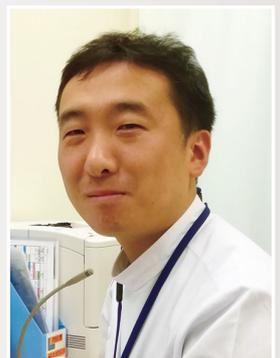
リンパ腫の特徴の一つは、さまざまなおところから発症することです。胃癌や肺癌のように名前が発症部位がわかる固形癌と異なり、リンパ腫は全身に分布しているリンパ節のどこからでも発症するのみならず、脾臓、骨髄、消化管、皮膚、分泌腺、生殖器、神経といったリンパ節以外の組織からも生じます。実際、固形癌と思って切除したらリンパ腫だったということはよくあります。発症の場所によって症状も異なってきます。身体の表面に近いリンパ節が腫ればそれが自覚症状になりますが、胸やお腹の奥でリンパ節が腫れても触ることはできないので、腫瘍が大きくなって体重減少や発熱、発汗といった全身症状が出てくるまで分からないかもしれません。

腸管で発症した場合は腹痛を起こすことが多いですし、神経組織やその近くで発症した場合は運動麻痺をきっかけに診断がつくこともあります。

2. リンパ腫は病型が大事

リンパ腫のもう一つの特徴は、たくさんのタイプ(病型)があることです。リンパ腫と総称される病気には約60種類の病型があります。それらの多くは、「1. 進行は速いが治療によって治癒が期待できる中悪性度タイプ」「2. 進行は遅いが治癒するのは難しい低悪性度タイプ」「3. 進行がとても速く強力な治療を要する高悪性度タイプ」のいずれかに大別されるので、タイプに応じて治療の方向性を決めることが重要です。例えばタイプ1. の代表格であるびまん性大細胞型B細胞リンパ腫は診断したらなるべく早期に治癒を目指した治療を開始すべきですし、タイプ2. の代表格である濾胞性リンパ腫^{ろほうせい}であれば、なにか都合の悪い症状が出てくるまでは治療しないという方針も許容されます。リンパ腫にも固形癌と同じようにステージ1~4の病期分類があり、病気の性質上、診断時にステージ4であることが多いですが、ステージ4でもタイプ1. のリンパ腫なら治癒する可能性は十分ありますし、タイプ2. のリンパ腫なら治癒は難しいとしても、適切なタイミングで治療を行うことで再発と寛解を繰り返しながらも天寿を全うできる可能性があります。つまり病期よりも病型の方が重要ということになります。

当院では関連診療科との連携によって迅速に病変を採取し、リンパ腫の正確な病型診断ができる体制が整っています。また、強力な化学療法を安全に行うために不可欠な無菌管理設備を有するほか、通院化学療法センターでの治療も可能でさまざまなニーズに応えます。治療効果の判定や再発の診断に有用なPET-CTがあることも当院の強みです。初発、再発に関わらず、当院での検査・治療を希望される方の受診をお待ちしています。



血液内科 主任医長
荒井 俊也

【専門領域】
造血器腫瘍、造血障害

【主な資格】
日本血液学会血液専門医
日本内科学会総合内科専門医
日本がん治療認定医機構
がん治療認定医

図:リンパ腫によるさまざまな症状